

# 2014年度経営者「環境力」大賞開催

事務局

2月20日、東京都渋谷区の青学会館アイビーホールにて、2014年度経営者「環境力」大賞顕彰式および発表会を開催しました。本号では受賞された7名のご発表概略についてご紹介します。

**会川 文雄 氏**

会川鉄工株式会社 代表取締役

このような賞をいただき、ますます頑張ろうという気持ち湧いてきた。

私の会社は福島県いわき市にあり、海から100mほどの海岸線がきれいに見えるところにある。それが3月11日の地震で大きく変化した。当社は昭和21年、製缶、鋳鉄、銅合金鋳物を生産販売するところから始まった。原子力発電所が35～40kmと近かったため、私と同様多くの方が原子力に関わる仕事に携わっていた。

東日本大震災の時、私どもの工場にも大きな津波がやってきた。工場近くは江戸時代からある防風林が被害を軽減してくれたが、工場の中は土砂で何から何まで大変な状況になった。幸い従業員全員が避難できたが、工場の機械はだめになり、電気系統もやられ、3ヶ月の間水道が止まった。地震から2日後の13日には社員が集まり、これから復興だとなっていたところへ、原子力発電所が爆発したという報道が入った。その結果、従業員が散りに避難することになってしまった。私は工場に留まり、これからの復興について考えた。3ヵ月後には徐々に従業員が戻り、復興のために全国から多くの方にご協力いただいた。そうした皆様に心より感謝している。

原子力発電所の事故により、原子力関連の

仕事は完全にストップしてしまった。そこで震災以前にもやっていた再生可能エネルギーに本格的に取り組み始めた。

現在、福島県では2030年に再生可能エネルギー100%を目指し、太陽光を592万kW、風力を1225万kW導入することを計画している。太陽光はある程度導入が進んでいるが、風力の技術は進んでいない状況だったので、我々は風力タワーの建設に取り組んだ。福島県いわき沖で世界初の浮体式洋上風力の建設が始まり、2011年に2000kWの風力発電が設置された。現在、私どもは7000kWの洋上風力発電の設置にチャレンジしている。復興に向けて福島企業の携わり、期待されている事業である。

また、昨年4月、福島県郡山市に産業技術総合研究所の太陽光発電・風力発電・地熱発電の研究施設が作られ、そちらの風力タワーを会川鉄工が製造した。世界初の技術で、直径3.6m、長さが40mの規模のタワー、地元のテレビでも報道され見学会も行った。

その他に太陽光発電の発電効率を上げる開発を大学と連携して行うなど、再生可能エネルギー全般の開発に取り組んでいる。

また、原子力発電所の廃炉に向けて、廃炉ロボットの開発・製造も行っている。これを応用し、山林火災が起きた際にポンプを輸送する災害用ロボットの研究開発もしており、もうすぐ完成する予定である。

また、廃炉に向けて福島の中企業がいかにか協力できるかを考え、フランスで廃炉の研究を行っている施設を訪問し、技術提携して



いる。原子力発電所では今なお1日400tの廃炉水が出ていることから実験処理装置を製作し、この納入も行っている。

こういった産業活動で私たちの取り組みは、復興大臣の訪問を受け、新聞でも色々な取り組みを載せていただいた。

まだまだ福島の復興は完全なものとなっていないが、私たち中小企業は、福島の自然が回復し、避難している若い人たちが戻り、福島が風化しないよう頑張っていきたいと思っている。今回の受賞、本当に有り難うございました。

### 大久保 雅生 氏

株式会社西日本ファーム 代表取締役

本日は経営者「環境力」大賞をいただき、関係者各位の皆様には厚く御礼申し上げます。



思えば、私は高等学校の時分から半世紀余り、不要物の利活用に取り組んできたが、その原点は戦後の石鹼作りにある。私どもの郷里、安栗郡では養蚕がとても盛んで、蚕を飼うのが農家のならわしだった。絹を作る際、繭の中にあるさなぎは熱湯につける過程で油を出す、それは臭くて厄介なもの。それで、大手メーカーから相談を受けた時、油に苛性ソーダを混ぜれば石鹼が作れると思い、簡単に引き受けた。しかし販売できる石鹼を作るのは並大抵ではなく、1年半の苦労を重ねて、ようやく販売できる固い石鹼を開発した。当時は物資不足で、石鹼を使わずに洗濯していた。そのような不衛生な時代に繭から石鹼を作り、一般家庭でも使える価格の石鹼を販売したことで、非常に貴重がられ喜ばれた。それが半世紀に亘る不要物の商品化の原点である。

一般的に不要物と言われるものも、頭を使

えば何でも商品化できている。何でももったいないという気持ちがいっぱい、今だに「もったいない」が口癖で家内から叱られることも度々である。リサイクルという言葉が一般的でない時代から、社会が要求しているものを不要物から作ってきたのが私の50年の歴史である。

現在、私は古畳を回収し、固形燃料を作っている。この固形燃料は、低級の石炭並みの火力があり、それをバイオマス発電ボイラーで使用している。何万枚もの畳を処理できる場所は、全国で兵庫・茨城・三重の3箇所しかなく、1か月で2万枚ほど処理している。特に、わらから固形燃料を作るのは全国で当社だけで、それくらい難しい技術である。

エネルギー利用以外の用途も考え、去年の8月から稲わらペレットの製造を開始した。このペレットは非常に硬く、製鉄会社でフォーミング材として歓迎され、月産200tほど納品している。フォーミング材は全国的に製鉄会社で不足しており、これからもこの稲わらペレットを成長させていきたいと考えている。

次に、エコストーブの話をしていただく。これは広島県庄原市の有志が里山木族というグループを作り、里山の暮らしを楽しみながら作成したもの。不要になったペール缶2個を利用したエコストーブは優れたもので、暖房機能だけでなく、ご飯焚きからおかず作り、湯沸しまで全部できる。このストーブは藻谷浩介氏が『里山資本主義』という本の中で紹介している。私は庄原へ講習に行き、なんとか播磨地区、姫路地区で広めたいと思い、「家族で楽しく省エネ」というエコストーブ教室を開催している。この工作はとても面白く、参加者は一生懸命にやっている。小学校時代に覚えた工作を思い出すようにやるから面白い。完成し火入れ式での拍手と喜びは皆さんにも味わっていただきたい。

このようなバイオマス燃料への挑戦も含め、様々なものを商品化している。あくまでも社会が求めるものを作っており、研究開発で終わらずビジネスとして成り立っている。

不要物は研究すればどんなものでも商品化できることを腹に据えて、今後も環境力を生かして不要物の商品化に取り組んでいきたい。

## 大田 稔之 氏

株式会社アキテック 代表取締役

今から69年前、先代が安芸の宮島出身だったことから、安芸製作所という名前で立ち上げ、昭和56年にアキテックに名前を改めた。



先代が昭和4年に日立亀戸工場に入社して、終戦後に独立した会社である。東京江戸川で創業したが、業務拡大に伴い、日立製作所が亀戸工場をいくつかに分散した。その中でモーター作りのメインを習志野工場に持って行き、先代の考えで千葉県千葉市に移転した。当時、会社の仕事は日立のモーターの手伝いが8~9割で、寄らば大樹で食っていけるという精神で協力工場をやっていた。

先代が私を経営全般と仲間作りのために千葉市商工会議所に入れた。29歳の時には議員に立候補し、40年やりながら、後半は工業部会長としてリーダーシップを取らせてもらっていた。千葉市法人会も今年で30周年になるが、その間お手伝いさせてもらって、副会長を7年、会長8年やらせてもらった。また、千葉県は自衛隊の基地、分屯地が10か所ある。引退された自衛官の就職を援護する会、就職援護協力会を立ち上げ、千葉県の会長を務めさせてもらっている。このように色々なことをさせてもらいながら、千葉の地で多くの仲

間がでた。

現在、日立製作所の仕事は絞り込んで、半分ほどになっている。その他の分野としては、自社で開発した変圧器、手のひらに乗るものからロッカー、トランスなど、設計から営業までを行い、生き延びている。

千葉に来た当時は世の中が人手不足で、人は金の卵と呼ばれていた。その時に地元の中学校の先生と知り合い、障がいを持つ子を採用するようになったが、その時その子達の資質の素晴らしさに気づいた。何が素晴らしいかというと、変圧器の鉄心を作る仕事をしてもらっていたが、彼らはその仕事に誇りを持ち、自分に与えられた仕事に真剣に取り組んでそれが今日の給料になると自覚していたことだ。

以来、毎年数名採用し、中には脱落する子もいたが、今日では35名中9名が正社員で、平均勤続年数が34年となっている。

私の考えは「鉄は熱いうちに打て」で、本来なら3年通う特殊学校を、先生と相談して、早い段階から仕事に来てもらう。先生は喜ぶし、お母さんも喜ぶ。本人も納得すれば、早いうちに自分の腕が一人前の世界に近くなる。採用は色々な方法があるが、決して優秀な子だけを選ぶのではない。1年生で工場見学、2年生で実習させる。3年生での実習は就職前提で、その子の技量を見てとるわけだが、その時の技術よりも、一生懸命コツコツできる子かどうかを見る。また、自分でもらった給料でお母さんにハンカチ一枚を買ってあげた子がいるが、自分の稼ぎで他人を喜ばせることで、働くことの意義が分かってくるようだ。その他に、グリーン調達で8年前からエコアクションに取り組んでいる。エコアクションの内容は、根本的な部分で環境力大賞の考えと共通する部分があると感じており、これからもこれを機軸にして取り組んでいきたい。

## 大場 龍夫 氏

株式会社森のエネルギー研究所 代表取締役

本賞をいただいたことを感謝いたします。私がいただいたというより、私に付いて来てくれた社員がもらえたものと思っている。



私は、東京墨田区のメッキ工場で生まれた。メッキは色々な薬を使い、排水処理が難しい。基準オーバーの事件があったこともあり、そのことで、環境を強く意識するようになった。

大学時代に日本は鎖国すべきだと本気で思い、有機農業や自然エネルギーに興味を持ち、自然エネルギーの世界に入った。卒業してすぐ1990年ごろに木をガス化して発電する実験を手弁当で始めた。家庭用系統連系太陽光発電器を手作りしたり、揚水風車をドイツから輸入したりしたが、木をガス化して発電した時の感動が忘れられず、今に至っている。

我が国は、森林が3分の2を占めているが、使わずに荒れている状態の一方で、世界最大の木材輸入国であった。人工的な森林は、手を入れなければ生態系にも悪影響を及ぼすが、適切に使って手入れをすれば生物を育てられるし、水も涵養してくれる。当時、森林バイオマスは誰もやっておらず、自分がやるべきではないかと思い、その使い方を考えるところから、エネルギーの流通システムを構築したいという思いでやってきた。よく誤解されるが、木は燃やすと二酸化炭素を出す、成長した分を使えば二酸化炭素は増えも減りもしない。これがカーボンニュートラルと言われる所以。

森林資源はエネルギーだけでなく様々なことに使え、地域に広く分布していることから、

これを活かすことで地域経済の活性化にもつながる。

森林資源は自然の恵みであり、私たちの会社のミッションは、それを最大限に生かすことである。自然と人間が離れすぎている今、自然の象徴である森林に感謝し、もう一度つながりを再生する。それが地域を活性化する。そして温暖化を防止し、豊かな持続し続ける社会に転換することが私たちのゴールではないかと思う。これは私たちの世代だけでできる話ではないし、スタートした時は今のような形で森林が見直されたり、再生可能エネルギーが注目されるとは思ってもみなかったが、時代はすごいスピードで動いている。

森の恵みは、太陽光や風力利用と違って100年単位で考える必要がある。植えてから孫の代で収穫できるという長いタームで考える必要があり、通常の経済活動とは違い、難しいところでもある。木を加工し、様々な活かし方をしていくが、エネルギーはその一つに過ぎない。その他に紙や板、柱など様々な活かし方があり、そういうものを全体として活かして、最後のくずをエネルギーとして活かすのが本来のやり方だと思う。ただし、ある程度の流通量を確保しないと、全体として流れないのでエネルギーの役割は大事だと思う。

今後、私たちはエネルギーの活用から木材流通全体を増大させ、様々なサービス産業を築いていくことを考えている。現在行っているバイオマスの需要開拓を発端にして、森の恵みの流通を連鎖させていきつつ、いかに価値の高いものを作り続けていくかというのが事業の大きな方向性であり、私たちのテーマでもある。自然の恵みを活かして、人を元気に、森を元気にして、地域を元気にしていければと思う。

聞いていただき、ありがとうございます。

## 小松 和史 氏

三友プラントサービス株式会社 代表取締役

環境力大賞の12項目を見直して、会社の経営に活かしている。当社の事業について3つほど簡単に説明させていただきます。



一つ目として、私どもの会社は有害危険物の処理を得意とする会社で、マーケットは全国にあり、取引企業数は3000社を超えている。施設は北海道から関西まで、焼却工場を5施設持っている。その他に化学処理工場を3か所、最終処分場を1か所、それらを繋ぐためのプライベートバスを関東圏、大阪に持っている。このような形でお客様のニーズに対応しているのが弊社グループである。

二つ目として、設備を作る上での設計部隊、鉄鋼工場、メンテナンス等々の施設を持っており、毎年、JICAやJETROから見学希望が多く、弊社の施設にて知見を深めてもらっている。

三つ目として、技術力が挙げられる。各工場には計量証明事業を取得した分析室がある。各大学との共同研究も行っており、フロン分解技術については前々回大賞を取られた静岡の鳥波さん（東海サーモエンジニアリング株式会社）とともに開発を行った。ダイオキシン問題が話題になった時、当社工場の焼却処理は湿式だったため規制は問題なくクリアしていたが、スポット的なサンプル分析が正しいという保障がなかった為、連続のモニター装置を海外から導入してダイオキシンに合わせた装置開発を行い対策した。

その他、近年では汚染土壌の処理も力を入れている。これから東京オリンピックによる

工事、さらにはリニアの工事が始まると汚染土壌が出てくる。

環境力を生かした会社の経営事例として、スターバックスコーヒーとのモデルを紹介したい。スターバックスコーヒーからすると、廃棄物としての一番のテーマはコーヒー豆粕である。この処理について、従来の堆肥ではなく、もっと有意義なものに利用したいというテーマで7年前から取り組んでいる。スターバックスコーヒーは牛乳を仕入れていることから、牛乳を生産する乳牛の餌に利用するグラウンドデザインを私たちが考案し、スターバックスコーヒー、メニコン、そして当社社員が必死に検討をかさねた結果、餌の生産方法や効果等々を組み立てることができた。このモデルは廃棄物を有効利用したいという社員の高いモチベーションでできたプログラムである。また、本賞で示されている12項目をかなり網羅した、環境力を発揮したモデルだと考えている。

また、静脈産業は時間軸を重要視した考え方を持った経営をしていく必要がある。例として、当社の千葉工場は山武杉の生産地に処理工場がある。そこで、森林関係の方々との信頼関係が重要と考え、コミュニケーションを取ってきたが、実際に話してみると、ものの考え方が非常に違うことに気付かされた。森林の時間軸は50年、100年。それらの時間軸を考慮してテーマを出すと皆が賛同してくれる。この関係性が現在でもよく続いている。こういう方々との関係性を活かした経営が私の考える環境力であり、これからも大切にしていきたいと考えている。

## 紺野 道昭 氏

株式会社こんの 代表取締役社長

当社は、古紙のリサイクルを行なっている会社で、来年度には65年目を迎える。他に産廃収集運搬と中間処理、書店、カフェも経営している。古紙を回収し、選別を加え梱包した製紙原料を製紙会社様に販売している。



一般的に、紙を1t作るのに30年物の立木が20本必要と言われている。弊社では昨年18万トンの古紙をリサイクルしていることから、360万本の立木、東京都千代田区と同じ面積の森林の保護を行ったことになる。

社是は、21世紀は心と環境の時代だということで「地球にやさしいココロジー ～エゴからエコへ～」。エゴイストからエコを考える人への転換を志すもの。経営理念は「お客様、社員の物心両面の豊かさを追求しつつ、地球環境を最優先に考え行動する」。このほか「こんの三原則」という宣言を10年前に行った、弊社幹部十数名による一泊二日の合宿で作成した。

子どもの頃は、クズ屋の息子、ボロ屋の息子と呼ばれ、社員は全員パンチパーマで眼鏡は斜め、靴はエナメル、「紺野組」と呼ばれた方がいいような会社だった。何とか良い会社になりたいと、環境整備だけでなく社員の人間力の向上に取り組むことを決意し、「働くことの価値を認め、全ての働く人の意欲を高める」という項目に注力した。

具体的な項目をいくつか紹介する。毎年1月の第2日曜日に「新春の集い」と題して、全社員が一堂に会する機会を作り、社員の表彰を行なっている。例えば、採用前は引きこもっていた子も力を発揮し最優秀社員賞を取ったこと

がある。彼には今まで迷惑をかけたであろう両親の為に親孝行券を贈った。彼は「第2回私は自分の仕事が好き大賞」も受賞している。

百聞は一見に如かずの精神で、いい会社に習おうと、ベンチマーキング研修旅行も行なっている。菓匠shimizu様、伊那食品工業様、環境力大賞を取られた石坂産業様にも社員全員で見学に行った。また女性事務担当者対象の研修会では、独身女性の婚活応援も兼ね（笑）茶道教室も開催した。また掃除を通じて心のすきみをなくそうということで、「きれいにし隊」と銘打って会社周辺の清掃を行っている。現在、給料日はいつもよりもっと遠いところまで掃除をするというルールを社員が決めている。

また、社員のメモリアルを大切にし、誕生日にはバースデーカードを書き、ケーキやプレゼントを贈ることもある。お陰様で今年度の離職はゼロである。社内には公式サークルがあり、会社で助成金も出している。

さらに、社長室を開放してコーヒーを飲みながらコミュニケーションを交わし、ガス抜きや悩み相談ができるようにしたり、私の想いを伝えるために、給与明細にメッセージを載せている。これを全部綴じているという社員もいて、とても有難く思う。

2020年東京オリンピックの年は70周年を迎えるが、社員皆で新国立競技場で運動会をしようということになった。先日、早速予約の電話をしたが、電話を切られてしまい、メールで問い合わせようとしたら閉鎖されていたので、予約はまだ取れていない（笑）。

誕生日に社員からもらったチャンピオンベルトは私の宝物。従業員愛世界一と書いてあり、涙が止まらなかった。社員を愛する気持ちは誰にも負けない。

最後になるが、社長になって15年。毎日の微差、僅差の積み重ねでこのような賞をいただけた。今後も精進していく。

## 白石 昇央 氏

福島ミドリ安全株式会社 代表取締役社長

福島復興の見える化、これに必要な環境力に的を絞って話をさせていただく。

応募のきっかけは、当社からスピンアウトして作ったエナジアという再生可能エネルギーを活用した新規会社について、日刊工業新聞から取材を受けたことだった。

高知県に「RYOMA FOREST」と言われる町があり、「ニッポンの森林再生」と「CO<sub>2</sub>削減」を同時にできないかと思っていた。付加価値が必要だと思い、高知県知事、津野町長と、森林吸収量を増やして排出権を生成するなど、高知と福島でいつも色々な話をしている。

アウトプットとしては、例えばパチンコ屋の電気代をカーボンオフセットするため、「着るだけでCO<sub>2</sub>削減」というキーワードで店の制服に7.5kgのCO<sub>2</sub>削減権をつけて購入してもらうようにした。タクシーの運転手や学校にも提案し、着てもらっている。ワールドカップでも世界16か国の選手が被る帽子にRYOMAの排出権をつけて、帽子をかぶるだけでCO<sub>2</sub>を削減し森林を保全するという活動を行なった。3月11日、震度6強の地震が来て、停電、津波、さらに放射線災害という世界でも初めての災害が起きた。その時、ミドリ安全として自分たちがやってきたことをやろうと、高知県知事に相談して高知県の森林吸収のクレジットを福島県喜多方市の仮設住宅にかかる電気に寄付しようとした。それに加え、仮設を作るときに出た端材を使って復興商品として酒ホルダーを作り、「酒を飲んでCO<sub>2</sub>削減」というコンセプトで販売した。これは環境省が後援してくださり、カーボンオフセット推進協議



会主催のカーボンオフセット大賞の3位になった。中小企業で受賞したのは弊社だけ。ボランティアな部分も大事だが、我々は企業人なので、企業活動で環境価値を経済価値に変えていければ面白いと、そこで感じさせてもらった。

震災後の放射線管理については、福島企業が主体でないと何も残らないと感じ、対象の全市町村を回って、33市町村のうち23市町村と係わった。その後、大手から組もうという話があったが、それは断った。

ご存知の通り震災では、3県で約1万6000人が亡くなったが、亡くなった方の多くが高齢者と弱者であった。弊社のお客様である老人介護施設でも多くの方が亡くなった。

エネルギー問題を解決するため、まず世界はどうなのだろうとドイツ人のソーラー・コンプレックスのベン・ミュラーに会った。彼は工業デザイナーで脱原発を言わずに、メガソーラーのFITから始め、地熱供給、そして今では再生可能エネルギー100%の村を9つ作っている。多様な再生可能エネルギーをミックスしてエネルギーを自給する時代が来るのではないかと思う。

福島の復興は地元が中心となってやるべきだと思う。自身が生活する地域資源に根ざして、その企業と生活者が主体となって事業を地元から起こす。その思いで林野庁の実証事業を行って3年目に入る。チップを使って600kWと400kWのバイオマスボイラーでお湯を作り、南会津の町長を説得して、地域で熱電供給実証事業を始めた。将来的にはこれらを福島県内にいっぱい作ろうと思っている。

結局、社会の復興とは、成熟した社会が生み出している廃棄物のエネルギー化が当たり前になる社会だと考える。福島が壊したものは日本の環境神話と安全神話なので、ご参集の皆様と新たなニッポンの環境神話と安全神話を創発できれば嬉しいです。

# 2014年度経営者「環境力」大賞を終えて

庄司 元 (しょうじ はじめ/環境文明21 客員研究員)

2014年度の大賞受賞者7名が決まり、これで受賞者の数は45名（奨励賞2名を含む）となった。ここでは受賞者の傾向を性別、年齢別、在職年数、業種について整理してみた。

まず男女比は、女性が45名中3名で6.7%となっている（図1）。我が国の女性経営者の割合は7.3%（全国の社長114万人を対象にした帝国データバンク2013年調査）、アメリカは28.8%（National Business Councilsの2012年レポート）である。業種別に多いのは不動産業、小売り・サービス業とあり、本受賞者もこれに該当する。

次に、受賞者の平均年齢は60.1歳（図2）である。先のデータバンクの調査によると、社長の平均年齢は58.9歳、これから見ると受賞者は全国平均よりやや高目といえる。

次に経営者としての在職年数は平均18.0年で、その内訳を表3に示す。本賞受賞時点での年数だが、実際はこれより長くなっている。環境力を培われたことと、この在職年数がどう係わるのかは興味あるところである。

業種は、廃棄物処理業が多く13名、次に10名以上が卸し・小売業と製造業である（図3）。廃棄物処理業は環境関連業種そのものだが、卸し・小売業と製造業もその取扱商品を見ると環境関連の商品が多い。本賞の評価ポイントは、業種如何に係らず、その業種で如何に環境力を発揮されているかである。それでもこの上位3業種を見ると、環境関連の商品、サービスを提供する業種の方が、この賞が求めている環境力についての評価がしやすいため、応募が多くなるのかもしれない。他の業

種からの応募が待たれる。

最後に今年度は福島県から2名の受賞者が出たが、そのお二人とも東日本大震災それに関因する原発事故への対応が環境力に由来していることを特筆しておきたい。

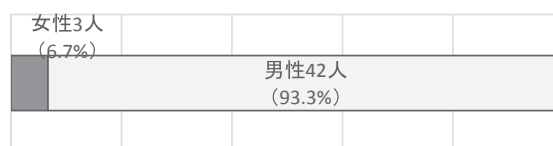


図1 男女別

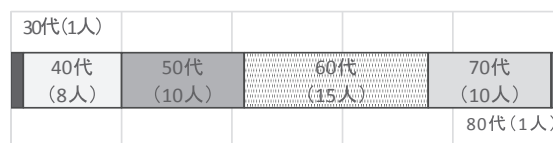


図2 年齢別

表1 在職年数

在職年数	人数
5年未満	5
5年以上10年未満	8
10年以上20年未満	12
20年以上	17
合計	42

(不明:3名)

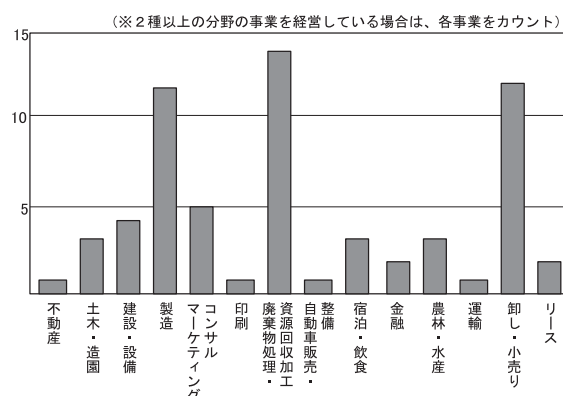


図3 事業分野別内訳